

光明皇后～妻として、母として～

京都女子大学名誉教授 瀧浪 貞子 氏

法華寺友の会・JAPAN21との共催で11月21日第2例会を開催。講師に京都女子大学名誉教授で日本古代史研究家の瀧浪貞子氏をお迎えした。天平時代、聖武天皇の后で孝謙天皇の母であった光明皇后の生涯を「続日本紀」「万葉集」の記録、天皇皇后の筆跡から説明して頂き、そこから浮かび上がる当時の情勢、光明皇后の波乱万丈の人生をわかりやすく語って頂いた。

【同い年の夫婦】

聖武天皇と光明皇后の直筆の書がある。お二人の筆跡を見ると、聖武天皇はとても大切に育てられた皇族でしっかりしたご性格。光明皇后は力強く何事にも動じない印象を受ける。二人は同い年で幼馴染だった。

生まれたのは西暦701年。大宝元年。九州の対馬で金が採れたことを記念し「大宝」という元号になった。以後、元号は途切れることなく「令和」へと続く。また701年は、遣唐使が中国へ渡り我が国は「日の本」であると宣言。まさに日本が中国から自立する画期的な年であつた。

そしてこの年に天平文化を背負う二人が生まれたことに、神様が二人を奈良の地に送り出したのではないかと思えてくる。

【聖武天皇と光明皇后】

光明皇后は「安宿（あすかべ）媛」といい、藤原不比等と県犬養三千代の間生まれた。聖武天皇の母である宮子は不比等の娘で光明皇后の姉にあたり、他に藤原氏で勢力を誇った4兄弟がいる。16才で皇太子妃に、17才で娘である孝謙天皇を出産、27才の時に長男基王を出産するも、満1歳を迎える前に亡くしてしまう。光明皇后はその名の通り光り輝く人生と



思われがちだが、実際は、わが子、両親、4兄弟と続けて肉親との別れにあい、また社会情勢では長屋王の変があり、とても平穏な人生ではなかった。しかし、夫を支え、一人娘の孝謙天皇を支え、天平時代を生き抜いていく。

聖武天皇は「首（おびと）皇子」といい、先の文武天皇と宮子の間生まれたが、母の愛情を受けることなく、祖父不比等の家で光明皇后と一緒に育った。不比等の屋敷は平城京の東側にあり、そこは法華寺にあたる。法華寺は不比等の屋敷が宮寺になったのである。東大寺は総国分寺と呼ばれ、法華寺は総国分尼寺と呼ばれる。

聖武天皇が14才で皇太子になったときに不比等の屋敷は平城京に組み込まれた。聖武天皇は24才で即位、

29才の時に皇族しかなれない皇后の位を藤原氏出身の安宿媛が光明皇后として立后。聖武天皇は不比等に対する功績を認めたわけだが、資料には不比等亡き後の藤原氏に対して牽制しているような記述がある。二人は幼い時からずっと一緒に過ごし、聖武天皇が56才で崩御するまで40年間連れ添った。聖武天皇が大切にしていた身の回りの宝物（正倉院宝物）が光明皇后によって東大寺に奉納されたことは、夫婦の愛情そのものだと思う。二人の結婚は皇族と藤原氏の架け橋であった。

【夫の体調、娘の将来】

聖武天皇は大仏を建立するまで5年間平城京を離れていた。信楽の宮での大仏建立が叶わず、貴族の不満

も大きくなり、挫折感とともに平城京に戻ってきた。心の空洞を抱える聖武天皇を光明皇后は支える。そして大仏建立へ向かうことになる。また、一人娘の将来について、続日本紀の中で光明皇后が胸の内を述べている。「あなたは女子だけれどあえて皇太子となつてほしい」。女帝となれば風当たりはきつくなる。結婚を放棄しなくてはならない。

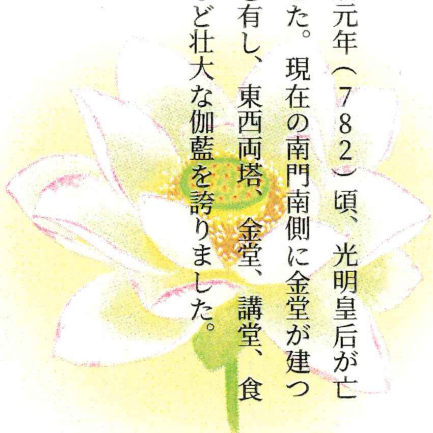
光明皇后は母として娘の将来を案じ続けた。聖武天皇、光明皇后が亡くなって1200年以上経つがとても身近に感じられ、光明皇后の役割を古代史からあらためて感じている。

光明皇后創建の 総国分尼寺

法華寺の歴史は今から1300年ほど前、聖武天皇の后・光明皇后の発願によってはじまりました。父・藤原不比等の死後、皇后は子どもたちから住み慣れた邸宅を皇后宮とされます。その後、皇后宮を宮寺に改められたのが法華寺です。

正式には法華滅罪之寺（ほつかけめつざいのてら）といい、総国分寺である東大寺に対し、総国分尼寺（にじ）として、女人成仏の根本道場としての役割を担いました。皇后は法華寺において尼僧の仏学研鑽を勧め、女人成仏の規範を示されました。また天皇崩御後は、天皇の菩提も祈られたのです。

伽藍の完成は延暦元年（782）頃、光明皇后が亡くなられた後でした。現在の南門南側に金堂が建つなど広大な寺地を有し、東西両塔、金堂、講堂、食堂（じきどう）など壮大な伽藍を誇りました。



法華寺HPより抜粋